

4-2 温暖な気候を活かした園芸産地の育成(テッポウユリ)

【成果の要約】

- 1 テッポウユリ初の八重品種「咲八姫」の生産の支援を行った結果、令和7年産の出荷本数は、令和6年産に比べ約1割増加した。また、令和8年産の切花植付球数は令和7年産の約1.4倍となった。
- 2 露地適応性品種「スカイホルン」の露地栽培実証を行った結果、目標となる3輪については確保できた。
- 3 知名町の若手生産者1名が、栽培上の課題解決に向けた取組を実施した。結果として期待した成果は得られなかったものの、課題解決に向けた意識の向上が図られた。

1 対象

テッポウユリ生産者 和泊町44戸，知名町25戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) 沖永良部のテッポウユリは、生産者の高齢化や施設の老朽化により生産量、販売額ともに減少傾向である。
- (2) テッポウユリ初の八重品種「咲八姫」は、令和4年4月から出荷が始まっており、今後の生産拡大が期待される。一方で、出荷率は高温や低温、日射量等に影響されやすいため、栽培技術の確立を図る必要がある。
- (3) 「咲八姫」の作型は、出荷率が高い3月中下旬～4月中下旬に限られており、12月出しから栽培できる新たな八重品種が求められている。
- (4) 露地栽培が可能な品種「スカイホルン」や「凜」は、施設が不要のため生産コスト低減が図られ、生産拡大が有望な品種である。
- (5) 生産の特徴として、需要期(12月，3月)に気象変動の影響により安定生産ができず、契約販売がしにくい。

3 活動内容と成果

- (1) テッポウユリ生産性の向上

ア 八重品種「咲八姫」の栽培技術向上

園振協本部や関係機関と連携し、現地検討会及び室内検討会により栽培技術や出荷技術の支援を行った。令和7年産の出荷本数は、約28,000本で令和6年産と比較して植付球数が増えたことにより約1.1倍に増加した。従来の品種よりも高単価で取引されるため、令和8年産の植付球数は約78,000球となり令和7年産の約1.4倍に増加した。

イ 八重系統の現地選抜試験

関係機関と連携して、八重5系統を12月、2月、4月出しの実証ほ設置を行った。12月に生産者、関係機関と知名町実証農家ほ場にて現地検討会を実施し、1系統について既存八重品種「咲八姫」よりも良い評価が得られた。今後、新たな八重品種を選抜できるよう支援していく。

ウ 「スカイホルン」, 「凜」の推進

関係機関と連携して、12月出しと3月出しの露地栽培展示ほ設置を行った。12月出しにおいては、高温の影響もあり目標の85cmの草丈を確保できなかったが、S~Mサイズの球根を使用すれば目標の3輪を確保できることが判明した。



展示ほの様子

エ 若手生産者のプロジェクト支援

高温期定植作型(12月~1月)において輪数および草丈が確保できない課題に対し、バイオスティミュラント資材(以下、BS資材)の試験および冷蔵温度の違いによる生育差の実証を行った。

その結果、BS資材散布の有無による明確な差は認められなかった。一方で、冷蔵温度の違いにより輪数および草丈を確保できることが確認された。しかし、発芽不良が多発するなどの課題が残った。来年度は、これらの課題への対策を検討する予定である。

4 今後の課題

- (1) 八重品種「咲八姫」の3月中下旬~4月中下旬の出荷率向上
- (2) 露地適応性品種「スカイホルン」, 「凜」の普及拡大
- (3) 冷蔵温度5℃での発芽不良対策

5 担当した普及職員

○肥後修一, 市来佑悟

4-2 温暖な気候を活かした園芸産地の育成 (スプレーギク, ソリダゴ)

【成果の要約】

- 1 管内栽培品種について病害抵抗性に関するアンケートを実施し整理した。
- 2 土壌還元消毒の必要最低限のかん水量（目安）を明らかにした。
- 3 スリップスの年間発生活消長を把握した。
- 4 ソリダゴ暑熱対策として使用した遮熱資材「青天張」は地温降下対策に有効であるが、雨滴のぼた落ちによる土壌流出が問題となる。

1 対象

スプレーギク経営発展志向生産者 39 戸
ソリダゴ経営発展志向生産者 47 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) 夏秋スプレーギクの本ほ、秋スプレーギクの母株ほ場において立枯性病害の発生により生産が不安定である。
- (2) スリップス被害による等級の低下、防除における薬剤散布労力の負担が大きく、効率的な防除が求められる。
- (3) 夏季の高温によりソリダゴの草丈伸長不良、収穫後の欠株が見られる。

3 活動内容と成果

- (1) 夏季の病虫害対策の確立（スプレーギク）

ア 病害抵抗性品種の検索(2年目)

沖永良部花き専門農協キク部会員に対し、出荷目揃会にて令和7年版品種アンケートを実施し、病害に強いと評価された品種を夏秋スプレーギクで2品種（サザンチェルシー、サザンチェルシーイエロー）、秋スプレーギクで5品種（セイエスター、セイクルス、テンダー、セイヨーク、エンゼルハート）選出した。

アンケートの集計結果は、花き専門農協キク部会員に提供して来年度以降の品種選定の参考に資した。

イ 土壌還元消毒効果の安定化

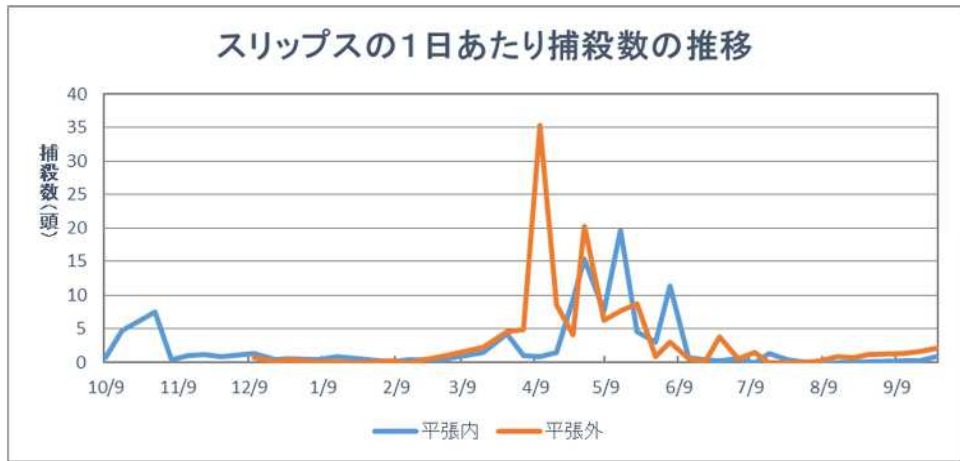
沖永良部地域は重粘土壌のため薬剤による土壌消毒は適切な水分管理が難しく、安定した効果を得にくいという問題点がある。土壌還元消毒は十分なかん水が可能なほ場で有機質資材が確保できれば安定した効果が期待できるため、地域にマッチした手法と考えられるが、これまで効果が不安定であった。そこで春先と夏の2回、実証ほを設置し安定して還元できる条件を検討し、成功の条件を得た。

- ① かん水量が少ないと還元状態とはならない。当地域では最低でも10a当たり250t程度のかん水量が必要と推察される。
- ② フスマ等の混和後はトラクタで踏圧し、土壌の隙間を減らす。
- ③ 地温が上がりやすい夏季は、還元効果に加え陽熱消毒効果も期待できる。



ウ アザミウマ類の年間発生消長の把握

花き類の重要病害虫であるアザミウマ類について、令和6年10月から令和7年9月までの1年間にわたり発生状況の調査を行った。気候による年次変動はあると考えられるが、春と秋に2回大きなピークがあることが分かった。発生量の多い春のピークは露地でおおむね4～5月、平張ハウス内はそれより2～3週間遅れであることも分かった。なお、露地、平張ハウスともハナアザミウマ類が最も多く、ついでミナミキイロアザミウマであった。



(2) 暑熱対策の検討 (ソリダゴ)

ア 遮熱資材を用いた夏季の品質向上

ソリダゴ鉄骨平張ハウスに赤外線遮光資材「青天張」を展張し、夏季の品質向上の実証ほをもうけた。気温は対象区と変わらないが、直射日光の照射が影響する地温については天候にかかわらず 0.8℃程度低く推移した。

切り花品質については、慣行区が草丈 74 cm、節数 72 節、青天張区がそれぞれ 80 cm、76 節と 10%程度向上した。

デメリットとして 10a 当たり資材代が約 70 万円と高価であること、目合が細かく、降雨時は 1 か所から雨水がぼた落ちし、欠株被害が甚大となるので使用可能なのは梅雨終了～秋雨開始までの夏季のみの使用に限定されることがあげられる。

4 今後の課題

- (1) 立枯性病害の少ないほ場の特徴についての調査
- (2) 効果的な防除法の検討

5 担当した普及職員 (○印はチーフ)

○肥後修一, 市来佑悟

4-2 温暖な気候を活かした園芸産地の育成(グラジオラス)

【成果の要約】

- 1 新規栽培者への巡回指導を行い、栽培技術の定着を図るとともに土壌病害対策など技術向上への課題整理を行った。
- 2 J Aあまみ知名花き部会員を対象に栽培研修会、出荷目揃会等で情報提供を行い、病害発生抑止への啓発を行った。年内出荷の作型は高温の影響による病害の発生や切り花長の不足等による出荷数量、上位等級の減少が見られたが、販売価格については堅調に推移した。

1 対象

グラジオラス生産者 81戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) グラジオラスは競合する地域がなく、販売も好調であるため、収益性が高い品目である。しかし、連作障害の発生や生産者の高齢化により販売額は減少傾向である。
- (2) 新規栽培者の生産量が不安定である。栽培に関する基礎的な知識の集積、現地での先輩農家の事例研修を通じ、安定した生産につなげる必要がある。

3 活動内容と成果

(1) 生産性の向上

ア 栽培基礎講座を通じた新規栽培者の育成

①グラジオラス栽培の基礎知識(座学)、②グラジオラスの定植方法(現地検討)、③グラジオラスの収穫方法(現地検討)の3回に分けて研修会を開催し、基礎知識の習得、技術向上を図った。

先輩農家を交えての研修会ということもあり、1回目の研修では互いに消極的な場面が見られたが、回数を重ねるたびに互いに疑問に思うことについての意見交換がなされるようになり、理解促進に資することができた。



イ J Aあまみ知名花き部会員への情報提供

10月下旬の部会定例会にて栽培初期の病害対策の情報提供を行った。

昨年度の年内出しは立枯性病害の発生が特に多かったため、今年度は年内出しの作付面積を減らしてロスをなるべく減らし、確実に出荷する体制を整えた。しかし、今年度は9~10月の気温が高く推移し、年明け以降も多発するほ場もあったので、病原菌の同定や病害対策指導を行った。

4 今後の課題

- (1) 定期的な栽培講習会等の開催による新規栽培者の栽培技術定着と生産量向上による経営安定支援。
- (2) 球根の消毒、ほ場の排水対策、定植時期の再検討等、病害発生対策の確立。

5 担当した普及職員(○印はチーフ)

○肥後修一、市来佑悟

4-2 温暖な気候を活かした園芸産地の育成(トルコギキョウ)

【成果の要約】

- 1 自家育苗及び切花栽培に適した品種を2品種選定することができた。
- 2 低濃度エタノールを利用した土壌還元消毒効果を確認することができた。

1 対象

トルコギキョウ生産者 和泊町10戸，知名町2戸，与論町6戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) トルコギキョウは、与論島や沖永良部島の切花販売額第4位で収益性や消費者ニーズが高い品目である。
- (2) 近年、種苗コストが軽減でき、計画的に定植できる自家育苗を導入する生産者が増加しているが、自家育苗及び切花生産可能な品種選定が急務である。

3 活動内容と成果

- (1) 生産性の向上

ア 自家育苗及び切花栽培に適した品種の選定

管内関係機関と連携して知名町にて実証ほを設置した。計2品種で7月上旬播種，9月下旬定植，1月下旬出しにて種子冷蔵のみで育苗した切り花の生育調査を行い，2品種有望品種を選定した。実証農家からは「来年も栽培したい」との声もあり好評であった。



実証ほの様子

イ 低濃度エタノールを利用した土壌還元消毒を実施

関係機関と連携して、与論町にて低濃度エタノールを利用した土壌還元消毒実証ほ場を2カ所設置した。7月中旬に土壌消毒処理を実施し，約1～2か月間被覆した後に土壌中の菌密度を測定し，菌密度の低下を確認できたが，1カ所では病害の発生が見られたため，今後対策を検討して行っていく。

4 今後の課題

- (1) 自家育苗及び切花生産に適した品種の選定
- (2) 立枯病による土壌病害対策

5 担当した普及職員

○市来佑悟，肥後修一，満吉俊也